首都大学東京都市教養学部人文・社会系
東京都立大学人文学部
「人文学報」第413号
（日本語教育学）
2009年３月抜刷

新聞・小説の用例に見られる「につれて」「にしたがって」の出現傾向について

長谷川　守　寿
成　　芳　　芳

新聞・小説の用例に見られる「につれて」「にしたがって」の出現傾向について

長谷川守寿
成　芳　芳

1. はじめに

一方が変化すると他方も変化するという意味を表す表現として，「につれて」「にしたがって」という形式がある。この2つの表現は，共通点に関する記述は多いが，相違点に関する記述は少ない。本研究では，「につれて」と「にしたがって」の使用例に基づき，先行研究の指摘を確認し，それぞれの構文特徴や意味特徴から，用例の出現傾向を探り，相違点を明らかにする際に必要となる観点について考察することを目的とする。

なお，本研究では「につれて」「にしたがって」を複合助詞として位置づける。複合助詞は，砂川（1987）に従い，「複数の語が結び合わさって，全体として1語の助詞に準ずる機能を果たすようになった連語」とし，「語構成からみて」，「動詞や名詞など，実質的意味を持つ語が，その実質的意味を失い，形態的に固定化して，助詞と同じような機能を果たすようになったもの」とする。

2. 先行研究と本研究の目的

「につれて」「にしたがって」の辞書的な意味記述を見ると，ほとんどは置き換え的な説明である。例えば森田・松木（1989）では，「接続助詞の働きをするもの」の下位項目に「相関を示す」を挙げている。そして実際の語彙として「に従い」「に従って」「につれ（て）」を取り上げ，両者の差異は指摘せずに，以下のように説明している。

動詞の連体形を受けて「Aするに従い＜に従って＞Bする」「Aするにつれ

（て）Bする」の形をとり，Aの動作・作用・変化の進行に対応してBの動作・作用・変化が進行することを表す。時間的にはAがBより多少早く生じることになる。（p.88）

山崎（2006）は，毎日新聞（「毎日新聞データ集2002年版」）を資料として，「につれて」379例，「にしたがって」51例を収集し，『分類語彙表－増補改訂版』（2004）（以下『分類語彙表』）の意味分類によって，「につれて」「にしたがって」の前接語と後続語の意味分布を調べている。山崎（2006）によると，前接語における両者の差異は表１のようになる（以下，表番号と文番号は本稿にあわせて変更した）。

表１　「につれ/て」「にしたがい/ って」の前接語の意味分布の差

意味分類	につれ/て	にしたがい/ って
2.1560 接近・接触・隔離	39	0
2.1540 上がり・下がり	21	0
2.3062 注意・認知・了解	11	0
2.1600 時間	48	3
2.1526 進退	50	5
2.1583 進歩・衰退	19	2

（山崎（2006），p.110より）

山崎（2006）はこの結果に対して，「特徴的なのは，＜2.1560 接近・接触・隔離＞の39例のうち34例が「近付く」の例であることである。逆に言うと，「近付く」＋「にしたがい/ って」という例はなかったということである」と説明している。

一方，中溝（2004）では，小説のデータをもとに(1)(2)のような「近づく」＋「にしたがって」の用例を挙げている。

(1)　加藤は浜坂に近づくに従って妙な気持ちになっていた。　（『孤高』）

(2)　近づくにしたがって，私はうれしさ，かなしさ，当惑，に胸がふるえました。　（『ビルマ』）

また，田中（2001）では「につれて」について，「名詞では「回復，普及」や「高齢化，近代化」など，一般に「スル」動詞となる動作性名詞が多い」，「にしたがって」については「名詞句接続は実際の用例にあたったかぎりでは，ほとんど見られなかった」との指摘があった。

このように，新聞１年分のデータには「近付く」＋「にしたがって」の例は見られなかったが，小説では現れている。新聞１年分では偶然出現しなかったことも考えられるし，また新聞というジャンルではこのような表現が使われないという可能性もある。

さらに，山崎（2006）では，後続語の意味分布から見た「につれて」「にしたがって」の差異について，以下のように述べている。

「につれ/て」「にしたがい/って」の用法に差異が見いだされたのは，＜2.1502 開始＞の意味分類に属する語句のみであった。具体的には，「につれ/て」の後件には，「上がり始める，集まり始める，色づき始める，崩れ始める(2)，生じ始める，脱ぎ始める，始める(3)，もたげ始める(4)」が合計15回現れるが，「にしたがい/って」の後件には，この意味分類に属する語は調査範囲には現れなかった。(p.111)

山崎（2006）では「データの量を１年分としたのも，全体的な傾向をさぐるものであるから，複数年のデータで分析しても結果はさほど変わらないであろうと想定されるからである」(p.105）としている。しかし前述の前接語の調査結果とともに，1年分と限定したことが出現に影響している可能性は否定できない。そこで本稿では，以上の先行研究の結果を確認しながら，まず前接語について，「近付く」＋「にしたがって」の出現は，1年分にデータを限定していることによるのか，それともジャンルに関係しているのか見る。さらに，山崎（2006）では後接語について，「につれて」「にしたがって」の差異が見られたのは１つの意味項目だけであったが，これは新聞の単年度に見られる特徴なのか，それとも新聞に共通の特徴なのか，小説ではどうなるのかを考察する。

3. 用例採集資料と調査対象

3.1. 資料

コーパスには様々なジャンルが考えられるが，本研究では新聞と小説に限定し[1]，新聞は『CD - 毎日新聞1997データ集』，小説は『CD - ROM版　新潮文庫の100冊』を用いた。新聞は97年１年分のデータで，著作権処理が済んでいる記事を集めたものである。そのため新聞紙面では連載小説なども含まれるが，新聞データには小説は含まれていない。そして紙面の区別をせずに用例を収集した。データ量は38,914,457語である[2]。以下「毎日」と呼ぶ。例文には月日を示す。『新潮文庫の100冊』は79作品[3]から「地の文」と「会話文」を区別せずに用例収集を行った。データ量は6,154,548語である。以下「新潮」と呼ぶ。例文には小説のタイトルを示す。

なお，データの安定性という面で１年分の新聞だけで新聞を代表させてしまうことには問題がある。また新聞は1997年に書かれたものであるのに対して，小説は戦後に書かれたものというように，書かれた時期が異なるため，それらを単純に比べることにも問題がある。しかしデータ量としては先行研究の分量を超えたものであり，研究の観点を見いだしていくには充分であると判断した。

3.2. 調査対象

調査対象となるデータの取得方法は，単純な文字列検索で，「につれ・につれて」「にしたがい・にしたがって」の４つの形式を漢字表記された場合も含めて検索した。その中から，以下のア）からエ）は調査の対象外とし，複合助

1　シナリオ原稿（34作品）も調査したが，後述する基準に当てはまる例は（ｉ）のみであった。そのため本研究では，シナリオは対象から外した。

(i)　寺崎「(略）……でもね，年取ってくるにつれて，自分のホモ的部分を殺して生きるのが辛くなって……」　（『オコゲ』より一部略）

2　CD - ROMに収められているデータから記事の部分を抜き出したものを茶筌（ver2.4.1）で形態素解析を行い，延べ語数を求めた。なお，データ中には朝刊・夕刊等で記事が重複することがあるが，その重複は考慮していない。

3　日本人作家による作品で，初出として戦後に発表あるいは出版された作品を選出した。

詞として使われている文を取り出した。

ア）「につれ・につれて」「にしたがい・にしたがって」が本動詞として使われている文

(3) その場で逮捕され，国家警察テロ対策支部に連れていかれた。

（毎日１月12日）

(4) 生きのこっている者については難民たちの意志にしたがって町の誰かが処理をした。（新潮『流亡記』）

イ）「につれ・につれて」という表現が，「つられる」という意味で使われている文

(5) すぐまえに例の女が上り三つ目の駅までの切符を買ったのにつれて，やはりおなじ切符を買い，やがて来た電車に，どやどやとひとに押されながら，女とおなじ箱に乗った。（新潮『かよい小町』）

ウ）「これ・それ＋につれ・につれて」や「これ・それ＋にしたがい・にしたがって」という表現の中で，「これ」「それ」の指示対象を観察し，ア），イ）と同様の文

(6) 「放送番組基準」は放送法第３条の３の「放送事業者は，放送番組の編集の基準（番組基準）を定め，これに従って放送番組の編集をしなければならない」という規定に基づくものだ。（毎日12月25日）

(7) 私には私なりの航海図も，羅針盤も有った。それにしたがって，目的地への最短距離を泳ぎ抜くつもりだった。（新潮『風に吹かれて』）

エ）検索にかかってしまう無用な表現

(8) 寄宿舎に帰る数人づれの女子工員のうち，泣いている一人の肩に連れの一人が手を置いて，「あんた，泣かんと置き。これでもう空襲はないけんな」と慰めていた。（新潮『黒い雨』）

次に，複合助詞「につれ・につれて」「にしたがい・にしたがって」を含む文の用例数をカウントした。(9)のように，1つの文に「につれて」が2度出現する場合は，2例として数えた。

(9) はじめはおとなしく，つつましいが，やがて時間がたつにつれて，しっかり根を下ろし，根を張るにつれて，暴君の顔を呈してくる。

（毎日7月17日）

以上の基準により選出した結果をまとめたものが表2である。

表2 ジャンル別抽出結果

	毎日	新潮		毎日	新潮
につれ	311	109	にしたがい	1	2
に連れ	5	0	に従い	35	5
につれて	165	196	にしたがって	12	32
に連れて	8	0	に従って	41	26
合計	489	305	合計	89	65

本研究では，「につれ」「につれて」のような，テ形と非テ形の用法の違いは考えない。そこで「につれて」は「につれ／につれて／に連れ／に連れて」，「にしたがって」は「にしたがい／にしたがって／に従い／に従って」を代表することにする[4]。

3.3. 調査方法

新聞と小説から，「につれて」「にしたがって」の前接語と後続語を抽出した。

4 なお，表2を元に「につれて」と「それ以外の語」とジャンル，「にしたがって」と「それ以外の語」とジャンルについてχ^2検定を行った。その結果ジャンルと「につれて」（χ^2=390.5，p<.001），ジャンルと「にしたがって」（χ^2=597.1，p<.001）には，有意な関連性があることが確認された。なお，「に従い」のように，名詞の後に位置する場合は「2語」，動詞の後に位置する場合は「1語」と解析され，語数が概数になるため，表に示すことは行わなかった。

山崎（2006）では，前接語・後続語についての定義がなされていないが，本稿では前接語は複合助詞の直前に位置する語とし，後続語は複合助詞の直後に位置する述語とする。ともに「語」を含むが，後続語は厳密にいえば，「後続述語」であるが，先行研究に合わせるため後続語とした。

なお，(10) のような複文の場合には，前接語の数と合わせるため，後続語は直近のもの（すなわち「呑み込まれ」）を取り出すことにした。なお抽出には専門のプログラムを作成し，さらに人手による確認を行った。

(10)　しかし，スーパードームに近づくにつれて，四方から集まってきた車の波に呑み込まれ，ほとんど前に進めなくなった。　（新潮『一瞬の夏』）

4. 考察

4.1. ジャンル別前接語の特徴について

「につれて」「にしたがって」に前接する語の品詞は，名詞か動詞だけで，他の品詞が位置することはない。そこで表2を品詞別にまとめたものが表3である（以後全て延べ語数である）。ともに動詞の頻度が高いようだが，新聞・小説に関係ないのか，χ^2検定を行った。「につれて」「にしたがって」それぞれについてジャンルと品詞に関して検定を行ったところ，ともに前接語の品詞とジャンルには関連性がないことがわかった（「につれて」は，$\chi^2=2.88$，$p=.09$。「にしたがって」は小説における名詞の度数が4であるため，フィッシャーの直接確率を求めたところ$p=.40$であった）。

表3　複合助詞のジャンル別前接語の品詞分布

	つれて		にしたがって	
	新聞	小説	新聞	小説
名詞	44(9.0%)	39(11.2%)	10(12.8%)	4(6.2%)
動詞	445(91.0%)	266(88.8%)	79(87.2%)	61(93.8%)
合計	489(100%)	305(100%)	89(100%)	65(100%)

4.1.1. 名詞に関する考察

名詞について新聞のデータを見ると，田中（2001）の指摘と同様，動作性名詞に「につれて」がついた例が数多く見られた。しかし動作性名詞に「にしたがって」がついた例も6例（「高度化」3例（11），「回復」2例，「普及」1例（12））見られ，全くないとは言えず，また小説にも同様の傾向が見られた（動作性名詞＋「にしたがって」の例は3例で，「経過」（13）「変移」「発展」各1例であった）。

(11) 通信・放送システムの高度化に従い，増えてくる“通信・放送弱者”に配慮した「情報バリアフリー」環境の整備に着手する。（毎日12月21日）

(12) シノピアは13世紀のブオン・フレスコの登場と共に増加，15世紀半ばのカルトン（紙の大下絵）の普及に従って減少するが，紙の入手がまだ困難であった時代の素描芸術の有様を伝える作例として重要である。（毎日9月7日）

(13) 彼を取りまいていた暗黒は時間の経過にしたがって薄らいでいくようだった。（新潮『孤高の人』）

本研究の結果は，「につれて」は田中（2001）の「一般に「スル」動詞となる動作性名詞が多い」という説明を裏付ける形となったが，田中（2001）の「名詞句接続は実際の用例にあたったかぎりでは，ほとんど見られなかった」には反する結果となった。「にしたがって」は，ジャンルにかかわらず名詞が前接語となる用例も見られた。なお，本研究で抽出した名詞は「回復・普及・経過・変移・発展」というように，動作性動詞と呼ぶよりはある状態の変化を表す名詞と呼べるもので，今後用語についてはさらに考察が必要となる。

4.1.2. 動詞に関する考察

前接語が動詞の場合，その動詞は自動詞であることが多い。新聞・小説における自・他動詞の頻度をまとめたのが表4である。他動詞の比率は低いが，ほ

とんどの他動詞は，中溝（2004）で指摘されているように，「時間の経過を表す用例や受身で使用されている用例」で「自動詞的な用法」の傾向があった(14)。

(14) 人は年齢を重ねるに従って，悲しいことのみを残して，昔のたのしかったこと，美しかったことを次第に忘れて行くのではないでしょうか。

（新潮『草の花』）

なお，「につれて」「にしたがって」それぞれについて，新聞と小説において自動詞と他動詞の頻度に有意な差があるのかについて，χ^2検定（5％）を行ったところ，ともに有意な差は見られなかった（「につれて」の場合χ^2＝0.25，p＝.62。「にしたがって」の場合χ^2＝0.04，p＝.83)。よって自動詞と他動詞の出現傾向は，ジャンルに関係ないといえる。

表4　複合助詞のジャンル別前接語（動詞）の種別

	につれて		にしたがって	
	新聞	小説	新聞	小説
他動詞	37(8.3%)	25(9.4%)	13(14.8%)	11(18.0%)
自動詞	408(91.7%)	241(90.6%)	65(85.2%)	50(82.0%)
合計	445(100%)	266(100%)	78(100%)	61(100%)

次に，「近づくにしたがって」の出現について考察する。新聞からは「近づくにしたがって」の例が2例（15）（16）検出された。「近づく」は「につれて」と共に現れる例が多いが，このように「にしたがって」の例も少ないながら見られた。同様の結果が小説からも観察され，中溝（2004）の指摘した（1）（2）以外に（17）が見られた。

(15) 夢に一歩近づくにしたがって，内向的な性格も変わっていったという。

（毎日8月17日）

(16) 先送りした課題は今後，拡大が近づくに従い立ちはだかることになる。

（毎日10月3日）

(17) 加藤の足は下宿へ近づくに従って速くなった。　　(新潮『孤高の人』)

これは山崎(2006)とは異なる結果になったが，このように頻度の低い用例については，1年分だけではあるかないかの判断はできないことを表しているといえる。データを増やし，更なる検証が必要であろう。

4.1.3. ジャンル別前接語の意味分布

表5は山崎(2006)にならい，前接語を意味分類ごとにカウントしたものである。『分類語彙表』に収録されている語には，意味分類番号が与えられているので，本稿では意味分類番号をそのまま引用して使うことにした。なお，同書に収録されていない語句は文脈に合致する最適な意味分類番号を付与した。この判断は成が行ない，判断に迷いが生じた場合は長谷川と協議した。

表5　複合助詞のジャンル別前接語の意味分布

新聞			小説		
意味分類	につれて	にしたがって	意味分類	につれて	にしたがって
2.1504 連続・反復	13	2	2.1500 作用・変化	35	6
2.1524 通過・普及	11	1	2.1504 連続・反復	14	1
2.1526 進退 ★	65	6	2.1511 動揺・回転	7	0
2.1540 上がり・下がり ★	35	4	2.1522 走り・飛び・流れなど	10	1
2.1560 接近・接触・隔離★	35	2	2.1526 進退	25	4
2.1583 進歩・衰退 ★	31	1	2.1560 接近・接触・隔離	47	3
2.1600 時間 ★	47	5	2.1583 進歩・衰退	10	1
2.3050 学習・習慣・記憶	9	1	2.1600 時間	43	8

(網掛け部分は新聞・小説と共通する部分，★は山崎(2006)と共通する部分)

前接語の分析について，山崎(2006)は，『「につれ/て」が「にしたがい/って」の約7倍出現していることから，両者の比がそれ以上のもの，あるいはそれ以上になりうるもの(片方の頻度がゼロの場合)を選び出す」という方法を採用している。本研究でも比較の方法を同一にするため，山崎(2006)と

同様の方法を使った。新聞では「につれて」489例，「にしたがって」89例で，「につれて」が「にしたがって」の約5倍出現している。小説では「につれて」305例，「にしたがって」65例で，「につれて」が「にしたがって」の約5倍出現している。新聞と小説から，それぞれ前接語の意味分布の差として，両者の出現の比が約5倍以上のものを選出した。なお，本研究では，頻度に差があるということは，これらの意味分類に含まれる語は「につれて」と「にしたがって」という類義表現において，頻度の多い方（この研究においては「につれて」）と共起しやすいものと考える。

まず，本研究の結果を山崎（2006）と比較する（表1参照)。新聞の単年度動詞の比較では，5つの意味分類が共通のものとして抽出された。「進退／上がり・下がり／接近・接触・隔離／進歩・衰退／時間」であるが，これは2年分という限定されたものであるが，新聞において「につれて」と共起しやすい前接語の意味分類といえる。また2002年1年分で特徴的な意味分類は1つ，1997年1年分で特徴的な意味分類は3つといえる。

次に，小説と共通するものはさらに4つに絞られ，「進退／接近・接触・隔離／進歩・衰退／時間」である。これらは「につれて」に前接しやすい語の意味分類としてあげることができる。

なお小説のデータを詳細に見ると，表6のような問題が見られた。これは，小説において，＜2.1540 上がり・下がり＞と意味分類される語が何に前接するかを示したものである。「につれて」に前接する語は「のぼる・登る・上る」で，「にしたがって」に前接する語は「下がる・降りる・落ちる・下降する」となっており，明らかに方向性が逆である。『分類語彙表』の意味分類を使用した場合，この違いを表すことができない。汎用性のある基準として意味分類は有効と思われるが，前接語を記述する際には，さらに詳細な分析を行った基準が必要となることが予想される。

表 6　小説における「上がり・下がり」に分類される前接語と複合助詞の関係

(( ) 内は，出現数を示す)

	につれて	にしたがって
前接語	のぼる(2),登る(1),上る(1)	下がる(1),降りる(1),落ちる(1),下降する(1)

4.2. ジャンル別後続語の特徴について

4.2.1. 動詞に関する考察

後続語を品詞別にまとめたのが，表 7 である。ゼロ述語は「歌は世につれ」のように，後続する語がないものである。後続語には動詞が一番多いが，名詞や形容詞も数少ないながら，出現している。また，小説に比べ新聞の方がいろいろな品詞（または形式）の述語が見られる。

表 7　複合助詞のジャンル別に見た後続語の品詞分布

	につれて		にしたがって	
	新聞	小説	新聞	小説
動詞	457(93.5%)	300(98.4%)	82(92.1%)	64(64.6%)
名詞	19(3.9%)	0	6(6.7%)	1(1.5%)
形容詞	5(1.0%)	5(1.6%)	1(1.1%)	0
ゼロ述語	8(1.6%)	0	0	0
合計	489(100%)	305 (100%)	89 (100%)	65(100%)

実例を観察すると，動詞には変化を表す動詞が多く，新聞・小説に関係なく「なる」が現れやすい。そこで動詞を「なる」とそれ以外に分けて集計したものが表 8 である。

表 8　複合助詞のジャンル別に見た後続語（動詞）の分布

	につれて		にしたがって	
	新聞	小説	新聞	小説
「なる」	131(29%)	78(26%)	14(17%)	22(34%)
「なる」以外の動詞	326(71%)	222(74%)	68(83%)	42(66%)
合計	457(100%)	300(100%)	82(100%)	64(100%)

新聞と小説における「なる」の頻度に有意な差があるか，χ^2検定（5％）を行ったところ，「につれて」は有意な差は見られなかった（χ^2=0.64，p=.42)。これに対し「にしたがって」は有意差が認められた（χ^2=5.79，p=.02)。よって，このことから，「につれて」の場合は，後続語「なる」はジャンルに関連がなく，「にしたがって」の場合は，「なる」の出現がジャンルと関連性を持っている。つまり，小説では「にしたがって―＜なる＞」の形式が出現しやすく，新聞では「にしたがって―＜なる以外の動詞＞」の形式が出現しやすいといえる。

4.2.2. ジャンル別後続語意味分布の特徴

表5と同様にジャンル別の後続語の意味で分類したものが表9であり，意味分布の差として，それぞれ7つの項目と4つの項目が指摘できる。「2.1583進歩・衰退」「2.3062注意・認知・了解」（表9の網かけ部分）は，新聞と小説で共に頻度に差がある意味分類としてあげられる。

表9　ジャンル別後続語の意味分布

新聞			小説		
意味分類	につれて	にしたがって	意味分類	につれて	にしたがって
2.1250 消滅	10	1	2.1540 上がり・下がり	6	0
2.1500 作用・変化	135	20	2.1580 増減・補充	23	1
2.1502 開始	16	3	2.1583 進歩・衰退	12	1
2.1581 伸縮	19	1	2.3062 注意・認知・了解	8	1
2.1583 進歩・衰退	27	4			
2.3062 注意・認知・了解	10	0			
2.3091 見る	10	0			

（網掛けは新聞・小説に共通する部分）

新聞で意味分布の差が見られた他の「2.1250 消滅」などの5つの項目には，小説では頻度に大きな差が見られなかった。同様に小説の「2.1540 上がり・下がり」「2.1580 増減・補充」は，「につれて」の頻度が高いが，新聞では頻度に大きな差がなかった。これらの項目が各ジャンルの差異として現れている

といえる。

また，山崎（2006）では「にしたがって」の後続語には＜2.1502開始＞の語が現れなかったと指摘しているが，(18)（19）のように，それぞれ3例ずつ新聞と小説から用例が見られた。他の例同様，さらに用例を増やし，特徴を明らかにしていく必要がある。

(18)　少年は小学高学年に移るに従い別の顔を見せ始める。　（毎日7月11日）

(19)　いくさがおわって満一年目，その秋口から，この電車には夜おそくなるにしたがって，こういう売物の風俗がちらほらしはじめて来た。

（新潮『かよい小町』）

5. まとめと問題点

本研究では，先行研究の指摘を確認しながら，「につれて」「にしたがって」という複合助詞の分析を行ってきた。さらに，「近付く＋にしたがって」と「にしたがって」＋＜開始＞の例は，数は少ないがそれぞれ新聞と小説の中で検出された。いわば山崎（2006）では出現しなかったものが，本研究では少ないながらも現れたということであり，頻度が低い用例があり得るか否かに言及するには，やはり広い対象のデータを検索する必要がありそうである。

また，本研究の結果得られた意味分布の差は，新聞間の発行年による違い，新聞と小説の違いを分離することができた。このような方法で複合助詞の分析をより深化させることができるであろう。なおその際『分類語彙表』の意味分類よりも，さらに詳細な分類が必要となる可能性を指摘した。

次に問題点について述べる。今回は量的な分析にとどまり，用例数の少ない「にしたがって」に特徴的な意味分類については言及できなかった。この問題を解決するには，より広範なデータ（例えばweb）から得られる情報を吟味して使用するなども必要となり，これらのデータが構文的特徴の検討には必要であると考えられる。

また，分析の際に『分類語彙表』を用いることの問題点が挙げられる。本研

究では意味分類番号を用いて集計をしている。意味分類番号を用いることは，分析の際に語の意味分類に一定の基準を取り入れることになり，汎用性の高い方法となりうると思われる。しかし同時に問題もある。『分類語彙表』では，名詞と動詞では異なる番号を割り当てている。例えば，名詞「アップ」は「1.1540 上がり・下がり」に，動詞「アップする」は「2.1540 上がり・下がり」と，それぞれ異なる意味番号が与えられている。今回考察した複合助詞である「につれて」「にしたがって」は，ともに名詞も動詞も前接語となるため，名詞と動詞を別々に集計するよりも，これらの語の分析には，意味分類，例えば「上がり・下がり」を元に集計することも考えられる。この方法をとった場合，意味分類による差がより明確になるため，この方法での集計も今後試みてみたい。

参考文献

国立国語研究所（2004）『分類語彙表―増補改訂版』大日本図書

砂川有里子（1987）「複合助詞について」『日本語教育』62号

田中寛（2001）「漸進性をあらわす後置詞―“―につれて”などをめぐって―」『大東文化大学紀要』39号

中溝朋子（2004）「～にしたがって」と「～につれて」『大分大学留学生センター紀要』1号

森田良行・松木正恵（1989）『日本語表現文型―用例中心・複合辞の意味と用法』アルク

山崎誠（2006）『新聞記事データに見る「につれて」「にしたがって」』『複合辞研究の現在』和泉書院

謝辞

本稿は，計量国語学会第五十二回大会（於　武庫川女子大学）予稿集に提出した原稿を改題し，さらに大幅な加筆訂正を加えたものである。発表に際してご意見を頂いた日本大学・荻野綱男先生，国立国語研究所・山崎誠先生，神戸大学・石川慎一郎先生，広島大学大学院生原田健太郎さんに感謝申し上げます。